

『宇治拾遺物語』の表現性に関する研究―教材化にむけて―

広島大学大学院教育学研究科教育学学習科学専攻教科教育学分野国語文化教育教育学領域
D一六三八八七 井浪

真吾

一、論文の構成

序章 研究の目的と方法

第一節 研究の目的

第二節 研究の方法

第一部 『宇治拾遺物語』の表現性とその位相

第一章 説話研究と『宇治拾遺物語』研究の現在

第一節 説話研究の現在

第二節 『宇治拾遺物語』研究の現在

第三節 これからの『宇治拾遺物語』研究にむけて

第二章 先行研究にみる『宇治拾遺物語』の表現性

第一節 説話研究の転回

第二節 説話排列、相対化―佐藤晃氏―

第三節 読書行為―荒木浩氏―

第四節 言語行為、言語場―森正人氏、小峯和明氏、竹村信治氏―

第五節 先行研究にみる『宇治拾遺物語』の表現性

第三章 『宇治拾遺物語』の表現性の実際

第一節 他者の言葉への懐疑

第二項 第17段と百鬼夜行譚

第三項 語り／騙りに潜む欲望の暴露

第二節 語り／騙りに潜む欲望の暴露

第一項 第61段の編述

第二項 第63段の編述

第三節 第30段の編述

第一項 第16段の編述

第二項 第30段の編述

第四章 『宇治拾遺物語』と言語場

第一節 『宇治拾遺物語』と文学場

第一項 御子左派と反御子左派の対立

第二項 為家の「幽玄」

第三項 真観の「幽玄」

61

36

22

14

1

第四項 『宇治拾遺物語』の表現性と文学場

第二節 『宇治拾遺物語』と仏教場

第一項 顕密寺社の言説戦略

第二項 〈仏教〉の問い直し―法然―

第三項 『宇治拾遺物語』の表現性と仏教場

第二部 『宇治拾遺物語』の教材化

第一章 古典教育の目標と古典教材

第一節 中等教育における国語教科書の中の古典教材―説話教材を中心に―

第一項 教科書の古典教材の現状

第二項 入門教材としての説話教材

第三項 中等教育における国語教科書の説話教材

第四項 〈入門教材〉としての説話教材の問題

第二節 国語教室で創られる〈古典〉―国語教育誌の中の〈古典〉―

第一項 〈古典〉をとりまく現状

第二項 カノンとしての〈古典〉

第三項 関係概念としての〈古典〉

第四項 国語教室で創られる〈古典〉に対する疑義

第五項 国語教室の〈古典〉とその更新に向けて

第三節 公共性・主体・古典教育―50年代における益田勝実古典教育論―

第一項 国語教育に関する益田勝実の仕事

第二項 益田勝実と文化運動

第三項 益田勝実の文学教育論

第四項 益田勝実の古典教育論

第五項 公共性・主体・古典教育

第四節 公共性・言説の資源・古典教育―60年代における益田勝実古典教育論―

第一項 益田勝実の反省

第二項 柳田国男との出会い

第三項 60年代における益田勝実古典教育論

第四項 公共性・言説の資源・古典教育

第二章 『宇治拾遺物語』教材化の構想

第一節 教室の『宇治拾遺物語』

第一項 中等教育国語教科書の『宇治拾遺物語』

- 第二項 『宇治拾遺物語』に対する教材観
- 第三項 教室の『宇治拾遺物語』
- 第二節 『宇治拾遺物語』の教材化にむけて
 - 第一項 これからの古典学習にむけて
 - 第二項 公共的空間
 - 第三項 テキストの対話、テキストとの対話
 - 第四項 『宇治拾遺物語』と公共的空間
- 第三節 『宇治拾遺物語』の教材化案
 - 第一項 第104段の編述
 - 第二項 第104段教材案

結章 研究の総括と展望

- 第一節 研究の総括
- 第二節 研究の展望

参考文献

181

二、研究の目的と方法

古典教育（本研究では特に断りのない限り古文領域のことを指す）の意義や目標、方法、教材などについては現在に至るまで幾度となく問われてきた。近年においては、平成一七年度実施の生徒質問紙調査結果において「古典嫌い」「古典離れ」の生徒が目立ち、「愛国心」育成と共にこれの解決も目論んだ現行の学習指導要領において、「言語事項」が「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」へと変更された。その際、各種国語教育誌において、「古典復活！」（『月刊国語教育』二〇〇八年六月）、「伝統的言語文化に親しむ」（『月刊国語教育研究』二〇一〇年八月）などの特集が生まれ、古典教育の意義や生徒の「古典離れ」の解決策などが様々に提示された。それらのほとんどは、古文テキストの表面的な内容読解に終始していたり、各々の古文テキスト観や古典教材観が更新されていかなかったりする。古文テキストを学習者にどう分かりやすく、どうおもしろく伝えることができるか、といったことばかりが模索されている。

また、ここ五年間においては、古典文学研究者の側から現在の古典教育、特に古典教材の取り扱いについての提言や異議申し立てが目立つようになつてきた。これらに目を向けてみると、古典教育研究からの提言や授業実践報告と同様、「生徒の古典嫌い」をどう打開していくかに議論が集中しており、教科書教材の読み方、教科書に採録されていない古文テキストの紹介、あるいは写本、変体仮名学習など、古典世界へのアプローチに関するものが大半である。ここでも「古典世界の奥深さ」、「古典文学の魅力」など、古文テキストの価値はアプリオリに認められ、これに「親しむこと」を目的としたものが多く、広く「人格の完成」（教育基本法）を目的とする教育の場での学習の意義との回路が明示されない。

このように、古典教育研究者や古典教育実践者、古典文学研究者の提言や報告は、古文テキストや伝統的な言語文化を先験的に価値あるもの

175

と認定し、これをどう分かりやすく、どうおもしろく伝えていくかばかりに議論が集中する。そして、それぞれのプロパーから発言や提言が為されるだけで、古典文学研究と古典教育とを架橋する試みは見られない。

こうした古典教育をめぐる状況を踏まえ、次の二点が課題であると考えた。

一点目は、古文テキストや伝統的な言語文化に対する捉え方である。前述したように、古典教育研究者の提言や古典教育実践者の報告、古典文学研究者の提言などにおいて、古文テキストや伝統的な言語文化はア priori に価値が認められている。これは現行の学習指導要領や二〇一八年に告示された新学習指導要領においても同様で、中等教育で扱われる「言語文化」は「文化的に高い価値」があるとされている。それ故、古文テキストや伝統的な言語文化は教養として伝えられるだけで、それらがどのようなモノやコトなのかについて考えられることがない。つまり、それらは静的なものとしてのみ捉えられ、動的に捉えられることがない。

二点目は、現代的な教育課題を踏まえた古典教育意義論の検討、これと関連した古典教材のあり方についての検討である。これも前述した通り、現行の学習指導要領やこれまでの古典教育論、授業実践報告では、古文テキストは教養として伝えられている。そして、学習者が、伝えられた教養を身につけることで、思考や認識を形成していくことが目指されていた。こうした考え方は、新学習指導要領解説においても顕著である。新学習指導要領解説は、普遍的な教養として古典を学ぶことで、予測困難な社会でよりよく生きる、といった「現代的な教育課題」を解決することを目論むが、これは果たして可能であろうか。抑も古文テキストに「普遍的な教養」など書き込まれておらず、時代ごとに価値を付与されて「古典」(カノン)とされたことはこれまでの研究で明らかにされている通りである。とすれば、新学習指導要領解説に記された「現代的な教育課題」は、「普遍的な教養」を伝えるとは異なる古典学習で解決していかなければならない。

そこで本研究では、『宇治拾遺物語』(以下、『宇治拾遺』)を主たる対象とし、『宇治拾遺』研究の成果を活かしながら『宇治拾遺』の表現性を分析し、それを踏まえた『宇治拾遺』の教材化を図ることで、古典文学研究と古典教育との架橋を試みたい。『宇治拾遺』は中等教育において戦後から教材として採録され、特に高等学校国語教科書においては、古典入門教材として採録されることが多い。しかし、これまでの『宇治拾遺』研究、特に80年代以降の『宇治拾遺』研究においては、『宇治拾遺』は表層的な読みやすさとは裏腹に、事象や語のモチーフ性、話型、さらには流通する人物像や逸話を援用しつつそれをずらしたりして説話を語り、批評性に富む複雑な表現性を有した説話集テキストとして語られてきた。つまり、古典教育で語られる教材としての『宇治拾遺』と、説話研究で語られる説話集テキストとしての『宇治拾遺』との間には大きな懸隔が認められるのである。この懸隔を小さくすることで、言い換えれば、『宇治拾遺』を対象に、古典教育研究や古典教育実践が明らかにしてきた古典教育の意義や目標を踏まえて、古典文学研究が明らかにしてきた『宇治拾遺』編述主体の対話の有り様を『宇治拾遺』の教材化に生かしていくことで、現在の古典教育が抱える課題の解決を目指す。

そこで、本研究の研究課題を次のように設定する。

- ① 『宇治拾遺』の表現性とその位相の探究(第一部)
- ② 古文教材、説話教材が置かれている状況把握、古典教育の目標の探究(第二部第一章)
- ③ ①、②を踏まえた『宇治拾遺』の教材化案の提示(第二部第二章)

これらの研究課題を達成するために、以下の方法を探る。

(1) 『宇治拾遺』の表現性の分析に関する先行研究の整理・検討

80年代以降の『宇治拾遺』の研究では、物語内容のみならず、『宇治拾遺』の表現性が窺われてきた。これらの『宇治拾遺』研究は、『宇治拾遺』の対話過程の具体的個別的な局面を明らかにしてきたという点で、その成果や表現性を分析する際の観点が、『宇治拾遺』の教

材化の一助となる。そこでまず、それらの研究を整理・検討することで、『宇治拾遺』の表現性を分析する際の手がかりを得る。

(2) 『宇治拾遺』表現性の分析

(1) の整理・検討を基に、『宇治拾遺』の表現性を分析する。その際、先行研究ではあまり為されることのなかった、同時代的な言語場からの『宇治拾遺』の表現性の捉え直しも試みる。

(3) 中等教育国語教科書に採録された説話教材の調査と考察

これまでとは異なる『宇治拾遺』の教材化を構想するにあたって、まずは『宇治拾遺』がどのようなテキストとして、どのように学習者に差し出されてきたのかを確認する。そのため、国語教科書において、どのような説話集テキストからどのような説話が、どのような教材として採られ、学習者とうい出会わされようとしているのかについて、教材本文やそれに付随する解説、学習の手引きなどを調査し、考察する。

(4) 国語教育誌に見られる実践報告の調査と考察

改めて述べるまでもないが、テキストの本文や教科書の教材本文、それに付随する解説や学習の手引きなどが、そのまま教育内容として学習者に差し出されるわけではない。国語科教員は、どのような教育内容のために、どのような古文教材を用いて、学習者にどのようなモノやコトとして古文テキストを差しだそうとしているのかを、古典教育の実践報告や古典教育研究者の提言などを調査し、考察する。

(5) 中等教育国語教科書に採録された『宇治拾遺』教材の調査と考察、『宇治拾遺』に関する古典教育の発言や実践報告の調査

(3)、(4) で行ったことを、『宇治拾遺』についても行う。

(6) 益田勝実古典教育論の検討による古典教育の意義や目標の検討

国語教師、国語教育研究者、文学研究者、教科書編集委員などの多彩な相貌をもつ益田勝実の古典教育論を、同時代的の状況との対話過程に注目して捉え直し、教材化を構想する上で必要な古典教育の意義や目標について検討する。

(7) 『宇治拾遺』教材化の提案

(1) ～ (6) を踏まえて、『宇治拾遺』の教材化を図る

三、各章の概要

第一部 『宇治拾遺物語』の表現性とその位相

第一部では、『宇治拾遺』の表現性を分析し、それを同時代的な言語場から捉え直し、『宇治拾遺』の表現性の位相を見定めた。

第一章 説話研究と『宇治拾遺物語』研究の現在

第一章では『宇治拾遺』を取り巻く説話研究の状況や『宇治拾遺』研究の状況をおさえ、『宇治拾遺』の表現性に注目する本研究を、現在の説話研究や『宇治拾遺』研究においてどのように位置づけられるのかを示した。説話文学会設立50周年の際に行われた記念シンポジウムに寄せられた趣意文によれば、説話文学会発足当時の説話研究は、「研究の市民権を獲得する」までは「説話がいかに文学であるかを立証すること」が目標として据えられており、説話集テキストの個性（所謂文学性）の「発掘認定」に重点が置かれていた。しかし、〈知〉の変動と合わせて説話研究も、「先鋭的な作品論」へ、そして「言説論」へと「舵を切」ることになる。こうした説話研究の状況を小峯和明氏に倣って、「説話概念の検証・資料の発掘・領域の拡張・方法論の回転」の四つの観点から整理した。これまでの説話研究では、新出資料を発掘したり、注目されなかった資料に注目することによって、扱う領域も拡張され、それに伴って方法論や「説話」をめぐる諸概念が見直され続けてきた。そして単一の説話集テキストだけを研究対象とするのではなく、諸テキスト、諸領域に目配りしながら、社会的事象・思想的事象・文化的事象を明らかにすることが現在の説話研究には求められている。また、『宇治拾遺』研究では、80年代以降「先鋭的な作品論」が発表される。これ以降は、『宇治拾遺』の説話と昔話を「話型」という観点で比較した上での民俗学的アプローチ、それまでの論考で取り上げられていなかった説話の解釈の提出、『宇治拾遺』の近世における受容の様相の解明などがそれぞれ為されている。更に近年では、一般向けの解説書や注釈書が刊行されている。こうした中で『宇治拾遺』はいままで経っても表現性において極点にある説話集テキストであると認定される。その中で、本研究は『宇治拾遺』という単一の説話集テキストを対象とすることで、『宇治拾遺』を一つの窓として、更新されてきた中世言語場の風景を観察し、世界認識や世界像構築の全体像を結ぶことが容易ではない『宇治拾遺』において、その一端を示そうとするものであることを述べた。

第二章 先行研究にみる『宇治拾遺物語』の表現性

第二章では、『宇治拾遺』に関する先行研究において、『宇治拾遺』の表現性について、どのようなことが注目され、『宇治拾遺』をめぐるどのようなことが述べられてきたかを整理し、『宇治拾遺』の表現性分析の手法としてまとめた。取り上げたのは「先鋭的な作品論」であった、佐藤晃氏、荒木浩氏、森正人氏、小峯和明氏、竹村信治氏の諸論考である。竹村信治『言説論— 説話集論』(笠間書院、二〇〇三年)を参照して以下のように整理した。

【『宇治拾遺物語』の表現志向】

○ 『宇治拾遺物語』の言述は、「世界」に流通している複数の“ことば”を「鋭敏な聴覚」をもって認知する〈発話主体〉が、伝えられる〈他者のことば〉、また、それをめぐる「他者の言葉」(読者)や場の返答として予期される“ことば”などへの応答として彼の“言葉のパレット”からそのそれぞれの“ことばのジャンル”(言説性)を認知、選択し、これらを展開させ、その展開の全体を発話行為の現在に捉え直すことで彼の現在にかかわる問題領域を開いていく、そうした過程としてある。

○ 「選択された“ことばのジャンル”のいちいちがこれに適応(＝一体化)してみせる〈語る主体〉たちを介して演じられ、その演技をつうじて語りが生成、展開」。

・ 「選択といい、一体化する演技(＝“適応”)といい、しかしそれらの応答の様態は、対象やそれをめぐる「他者の言葉」の“ことばのジャンル”性(＝言説性)への親和的な同化、予期される〈読者〉や場の返答の“ことばのジャンル”性(＝言説性)への相即的な随順としてあるばかりではない。(中略)すなわち、応答しての発話は、認知選択された“ことばのジャンル”に一体化して語られているように見えながら、それと相即的に同化するばかりではなく、演技の内に別の視点、違和異義反論を含んだものとしても行為されているのである」。

【説話行為、言語行為】

- (I) 「没主体的」に、登場人物の問答や行動によって話が展開し、「面白さがより興味本位的」になる語り。
- (II) ヒト・モノ・コトのモチーフ性を響かせたり、文体を模倣したりしつつ、一方でそれらとの落差を仕組む語り（＝「もどき」）。
- (III) 「同語・同音異義語・語形の類似する語の反復使用」といった言語遊戯による「意味の減殺や重層化、それによって引き起こされる読み手の視線の分散」。
- (IV) 説話の読み直し、読み深めを図る説話内容と話末評との齟齬。
- (V) 戯笑による意味のはぐらかし。

【編纂行為】

- (VI) 『宇治拾遺』内の「既に記された説話を想起させ」、「説話の中心的・主題的な部分」や「周辺」的な部分との「連想、対比、転換」により、「眼前に読み進めている説話の読みを刺激し、動揺させて」、「より拡がった説話世界を形成」。
- (VII) 説話同士の「連想・転換・対比」などにより、『宇治拾遺物語』という世界の中で連続した統一体を形成している、というかんじ」を読み手に与えたり、それを裏切ったりする（＝「一義的な意味づけの拒否」）。
- (VIII) 上記のことを達成するために、説話内容、表現の類似、読み手が連想しやすい説話の『宇治拾遺』への収録、説話分布の工夫。

またこれを『宇治拾遺』の章段を分析する際の観点として次のように整理し直した。

【『宇治拾遺』のテキスト観】

- ・ 「宇治拾遺は才ほど読む。読者の才に応じて多彩な風貌を覗かせる」。
- ・ 「読者を眩惑し、はぐらかし、煙にまく、したたかな（語り）」と戯笑性」。
- ・ 『宇治拾遺』は、説話の読みにおける享楽性を追求した説話集」。
- ・ 「語られる話を一律に秩序づけることとは無縁な精神性」。

【同話・類話との比較】

- ・ ヒト、モノ、コトにおいて違いは見られるのか。
- ・ 『宇治拾遺』話にしか見られない表現はどのようなものか。
- ・ 同話、類話にしか見られない表現はどのようなものか。
- ・ 同じような内容を表しながら、表現がどのように異なっているか。
- ・ 同話、類話との文体の一致度はどのようなものであるか。
- ・ 同話、類話はどのように意味づけようとしているか、あるいは意味づけを拒もうとしているのか。また、それは成功しているのか、失敗しているのか。これらと同話、類話の話末評、説話排列、収録された巻、語り方などから探れるのか。

【説話の語られ方】

- ・ 説話全体の語られ方はどのようなものであるか。
- ・ 話末評はどのようなものであるか。また、それは説話内容と齟齬をきたしているのかどうか。

- ・ヒト、モノ、コトのモチーフ性はどのようなものであるか。また、事実関係に照らしてどうであるか。
- ・同話や類話との異なりはどのようなことが起因しているのか。逆に異なりが見られないのはなぜか。
- ・模倣している話型や文体はあるのか。あれば、それとの異なりはどのようなところに見られるのか。
- ・言語遊戯はあるのか。あれば、それはどのようなことを実現しているのか。

【説話排列、説話の位置】

・説話排列はどのようなものであるか。また、それらによるどのような「連想・対比・転換」が起こり、各章段にどのような読み替えが起こるのか、あるいは起こらないのか。

・『宇治拾遺』内に類似する説話内容や類似する表現をもつ章段はあるのか。あれば、それらとどのような「連想・対比・転換」が起こり、各章段にどのような読み替えが起こるのか、あるいは起こらないのか。

【各章段の言述】

【同話・類話との比較】、【説話の語られ方】、【説話排列、説話の位置】で確認してきたことを通して、どのような問題領域をめぐって、どのような言説と対話し、どのように応答しようとしているのか。

第三章 『宇治拾遺物語』の表現性の実際

第三章では、第二章での整理をもとに、幾つかの章段を取り上げて『宇治拾遺』の表現性を考察した。

まず、第17段を取り上げ、次のことを指摘した。『宇治拾遺』の編述主体は、仏教に関する「他者の言葉」に取り巻かれながら、「他者の言葉」の騙り、そしてそれに張りついている世俗的な欲望に気づいていた。それ故、第17段において修行者が実際に体験したことと、修行者自身の語りとを比較できるように一段を語り、登場人物である修行者の騙りを暴露するという手法で、仏教に関する「他者の言葉」の騙りの一面、ひいてはそれに潜む欲望を暴いてみせたのであろう。『宇治拾遺』の編述主体は、「他者の言葉」の欲望に敏感で、それに懐疑的な眼差しを向ける主体であった。

次に第61段、第63段を取り上げ、以下のことを指摘した。第61段では、観修加持の話題は、道長と観修との関係をめぐる「予備知識」を背景に、信任厚い観修の召喚を語って道長の業遠への憐憫の情の深さを印象づける。けれどもそこに嘘が構えられ、作為が露わになる。その作為とは、愛顧憐憫する道長像の捏造（業遠と道長との関係の細やかさ）「道長の部下に対する心やさしい配慮」に向けられたもの。そしてそこに語り（騙り）の欲望が見透される。この欲望は道長賛嘆を志向する歴史語りのものだが、この欲望への視界を開く『宇治拾遺』はそうした歴史語りのあり方をメタ化し批評する位相にある。また第63段では、第61段からの説話排列や「予備知識」によって、撰家維持を果たそうとする道長の画策が、天皇家再興を企む後朱雀院によって取り込まれ、道長の画策失敗が後朱雀院の画策成功に繋がる局面が語られる。これが相手取るのは、道長に撰家衰退、天皇家再興の原因を求めない歴史語り、『愚管抄』に代表される後三条院を院政の淵源とする歴史語り、である。こうした歴史語りが『宇治拾遺』成立期においてどのようなコトとしてあったのかは定かではないが、これを編述主体の現在において問い直しているのが『宇治拾遺』であると言える。

最後に第16段、第30段を取り上げ、次のことを指摘した。第16段で語られるのは、「ほのかに聞」いて「心」に「深く念」じ、世間知を超越して愚直に地蔵を求め続ける〈信〉のあり方である。尼の行状は、『延命地蔵菩薩経』が説く「拔苦与楽」「生人天」「生浄土」を求めてのことではない。「極楽」往生は、生身の地蔵との値遇をこそ一途に求めた、その結果としてあるのだから目的ではないのである。それは、前者を語る多くの地蔵説話と異なっている。このように見ると、『宇治拾遺』の編述主体がこの第16段を通して〈信〉をめぐる問題領域をひらき、

それを仏教言説とは異なる形で改めて問い直そうとされていることがわかる。或いは、博打が悪報を蒙らず、悪徳の博打も無垢の一心帰依者もそれこれに応じた所得があったと語るところには、そのようにして営まれる人の世への洞察も含まれているように、それもまた「世界」を善因善果・悪因悪果の因果論をもって論ずる仏教言説とは異なる形で、現実即ち即して問い直そうとしたものと評することができる。また、第30段は『今昔物語集』(以下、『今昔』)巻一〇36との同話関係が認められる。『今昔』巻一〇36は「信」の有り様が語られている。『宇治拾遺』編述主体はそれを読みとり、「年寄を大事にする」、「古くからの言い伝えを重んぜよ」という教訓性を除き、伝承をひたすらに信じ実践する利他的な姫の姿を語り、「信」のありようを問い直す。『宇治拾遺』編述主体は、幾つかの章段を語りながら、「信」の有り様を問い直しているが、第30段は広く流通しているわけではない(他者のことば)を語りながら、「信」の有り様を問い直したものである。

第四章 『宇治拾遺物語』と言語場

第四章では、第二章、第三章で確認した『宇治拾遺』の表現性を同時代的な言語場から捉え直した。言語場に存在する多元的な(場)のうち、文学場と仏教場を取り上げた。

文学場では、御子左派と反御子左派との対立、その中でも特に両派の代表的な人物である藤原為家と真観(藤原光俊)との対立を取り上げた。両派の対立の要因としては、「文学理論の対立に根ざすもの」、「政治的「事件」の二点が指摘されており、後者については先行研究を参照するとどめ、特に前者について考察した。為家、真観ともに定家に師事しながら、表現志向の異なりが見られた。具体的には、為家の表現志向は「古き」「詞」、先行歌の「心」(本意)を重視し、和歌伝統を主体化してその再生産に向かうというもの。一方の真観のそれは定家流の「幽玄」を継承しつつ、新たな材や「知」を持ちこんで「心」を見つめ直し、「幽玄」の深化と更新を図るというもの。また、『宇治拾遺』第7段からは、慈悲救済の菩薩行に身を捧げながらも、それを仏教言説の理念通りには実現し得ない末代現世のありうべき救済の「聖」性を語り、「慈悲」(救済)、「聖」をめぐる問題領域をひらき、それを語りの現在において仏教言説とは異なる形で改めて問い直そうとすることが窺えた。こうした『宇治拾遺』の表現性と、「幽玄」や「心」をその現在において問い直す真観の表現志向との間に相同性を認めることができた。

仏教場では、顕密寺社と法然との対立に注目した。顕密寺社の僧たちは言説の権力性や「知」に関する僧と民衆との非対称性について熟知しており、殺生罪業観や末法思想などの仏教言説を巧みに用いて、戦略的に民衆の生を撈めとっていく。一方、こうした仏教言説の権力性や僧の言説戦略について熟知していた法然は、別の仏教言説を持ちこんだり読み替えた仏教言説を持ちこんだりし、顕密寺社が戦略的に用いる仏教言説を無化しながら、彼らの生きる現在において「仏教」の問い直しを図っていく。次に『宇治拾遺』第1段を取り上げ、仏教言説に別の仏教言説を持ちこみ、従来の言説では断ずることが出来ない僧の姿を語り、「仏教」を問い直していく『宇治拾遺』編述主体の姿を確認した。こうした点で、法然の表現性や思想との間に相同性を認めることができた。

第二部 『宇治拾遺物語』の教材化

第二部では、第一部をもとに『宇治拾遺』の教材化を図った。

第一章 古典教育の目標と古典教材

第一章では古典教育の現在の状況を把握、益田勝実の古典教育論から古典の「教育内容」について検討した。

第一節では、中等教育の現場で用いられている国語教科書の中の古典教材の現状を、説話教材を中心として把握した。説話教材は前田雅之氏や益田勝実が述べるように、短く完結していること、話の内容が現代人にも親しみやすく古典的教養をそれほど必要としないこと、そして、

何よりも笑い話などが多く面白いと見なされていることなどから、入門教材としての地位を確立している。しかしこうした説話教材を入門教材としてのみ捉えることは、幾つかの点で問題を孕んでいる。その問題として、教材観が更新されずいつまでも説話(集)Ⅱ民衆の文学として捉えられてしまっていること、そして文学研究ではすでにそうした捉え方は否定されていること、説話が説話集テキストの中の説話として読まれることがなく、言語主体の「世界解釈、世界像構築」には目が向けられることがないということ、それ故、テキストの教材としての可能性が縮減してしまうことを指摘した。

第二節では、「言語事項」が「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」へと変更され、古典教育の見直しを図られるようになった現行の学習指導要領下において、古文テキストがどのように学習者に差し出されようとしているのかを、二〇〇八年〜二〇一三年の各種国語教育誌において発表された実践報告や論考から探った。渡辺春美氏に倣い、まず古典観の点から、先験的に古典に価値を置く古典観(Ⅱカノンとしての古典)と学習者との関係において古典に価値を見出す古典観(関係概念としての古典)とに整理した。古典をカノンとして捉える論考や実践報告では、「美しい響きやリズム」、「日本民族の核心」、「現代に通じる普遍的な考え方」を有するテキストとして古文テキストが学習者に差し出されようとしていた。また、古典を関係概念として捉える論考や実践報告では、「表現例」、「身近なテキスト」、「(他者)」として学習者に差し出されようとしていた。このように整理した結果、古典教育に関する実践報告や論考においては、「ナショナルリズムへの接続の容易さ」、「日本文化の多元性」、「古典テキストの読みの深度」、「(知)の停滞」などに目配りが為されていないことが分かった。

第三節、第四節では益田勝実古典教育論を検討した。益田勝実は都立神代高等学校定時制の国語科教員としてキャリアを始め、国語教育に関して積極的に発言をしていた。そしてその一方で、古文テキストを主たる対象として、文学研究に関する論考を数多く発表している。またこれに留まらず、民俗学や言語学など多様な学問から学び、これらの領域においても幾らか発言を遺している。古典教育と古典文学研究との架橋を考える上で、こうした多様な学問から学び、古典文学研究においても古典教育においても一定の成果を遺した益田の古典教育論に注目すること、古文テキストの教材化に関する有効な手がかりを得ることができよう。こうした目論見から、本研究では益田勝実を取り上げることにした。

また、これまで幾度となく検討される中で、国語教育に関する「益田勝実の仕事」は一九六一年前後を一つの画期とする見方が定着している。本研究でもこれに倣い、第三節では、先行研究で目が向けられることが少ない50年代における益田の古典教育論を検討した。その際、文学教育に関する発言、古典教育や古典教材に関する発言はもちろんのこと、サークル活動の報告やサークルに関する発言、文学研究に関する発言などにも注目した。これらに注目することで、以下のことが明らかにできた。まず益田の教育観、文学観、古典観などの背景には、文化サークルでの活動や思索、文学研究があったことが確認できた。そして、これらの経験をもとにした古典教育構想は、真理と平和を希求し、人間関係の愛情に富んだ深まり、民主主義的な深い考え方、豊かな感じとり方、自由な創造的表現、総じて人間らしい生き方をしながら、自身を取り巻く現実と対決し、社会の変革を目指す学習者を育てることを目標としていた。そして、その目標を達成するために、ある時代状況の中で、書き手が自身を取り巻く現実から様々な問題を発見し、その問題に対して自分なりの応答を書きつけた、人間探究の過程が記された古典テキストと学習者を向き合わせる。そして、書き手の発見した問題やそれに対する応答、登場人物が抱える問題とそれへの応答などに対して、学習者なりの応答をできるようにする。そしてこれに留まらず、他の生徒や教師とも対話し、更に応答を繰り返していき、認識を深められるようにする。読んでは書き、書いては読み、自身を含めた民衆が抱える問題を発見し、それに対して自分なりの応答をできるようにするのである。その過程の中で、学習者がもの見方や考え方を深化拡充することを狙う。加えて、近現代文学テキストの読みなどを通じて、現実に対して認識を深めてから、古典テキストを差し出す必要があると考える。現実に対する認識を深めた上で古典テキストを読ませることで、今日からの視点だけの狭い見解を拡張、生徒の生を豊かにしていこうとするのである。こうした50年代の益田の古典教育論は、公共性構築を担う主体の育成を図る古典教育論であった。

第四節では60年代の益田勝実古典教育論を検討した。前述したように、60年代の益田古典教育論は50年代とのそれとの断絶が強調されることが多いが、基本姿勢に変化はないことが確認できた。益田は古文テキストをカノンとして捉えず、読み手との関係の中で価値を発見されるテキ

ストとして捉える。そのような古文テキストを、近現代のテキストを読んで問題意識を深めた学習者と向き合わせ、学習者のものの見方や考え方を深化拡充し、公共的な問題に対する学習者なりの応答をできるようにする。そして、真理と平和を希求し、人間関係の愛情に富んだ深まり、民主主義的な深い考え方、豊かな感じとり方、自由な創造的表現、総じて人間らしい生き方をしながら、自身を取り巻く現実と対決し、社会の変革を目指す人間に学習者を育てることを目標とする。こうした「基本姿勢」に、益田自身の国語教師としてのこれまでの反省と柳田の諸テキストとの出会いが加わり、言葉による見方や考え方に重点をおくようになる。益田が惹かれた柳田の考えとは、「内に根のある語」を用いながら「言論の自由、誰でも思った事を思った通りに言える」ようにすること、そのために「古文学」が「云ひ表はし方」(＝「社会の必要であるというものである。ここで益田は、学習者が古文テキストのものの見方や考え方を学ぶとともにその「云ひ表はし方」(＝「社会の新鮮未知なる現実」の「語り」とり方、「語り手たちの内奥の願望・幻想の外在する影」の「探りと」り方)を内に取り込んでいき、学習者自身が「云ひ表はし方」を鍛え、新たに言説を創造していけるようにする古典教育を提案していくようになる。益田は柳田の「喜談日録」に着想を得たのであるが、この「喜談日録」は公共性における「言説の資源」の議論と関わってくる。とすれば、60年代における益田の古典教育論も、必然的に公共性の議論と関わってくる。60年代の益田の古典教育構想は、誰もが公共性にアクセスできるようにすることを目指す。そして、そのために公共的な話題を認識し、当面のコンテキストに相応しい言葉を自由に用いることができるようにしたり、語り方や書き方を身につけさせたりすることをねらいとするものであった。

第二章 『宇治拾遺物語』教材化の構想

第二章では、これまでの議論を踏まえて、『宇治拾遺』の教材化案を提示した。

第一節では、『宇治拾遺』がこれまでどのようなテキストとして差し出されようとしていたのか、或いは『宇治拾遺』を用いてどのようなことが教えられようとしていたのかを、中等教育現場の国語教科書や、実践報告、提言などから探った。第二部第一章第一節で確認したことと同様のが窺えた。

第二節では、これまでの議論を踏まえ、齋藤純一氏らの公共性論やM・バフチンの言語論などを援用し、『宇治拾遺』の教材化構想を述べた。その中で古典学習の空間を公共的な空間にすることの必要性を述べた。そこでは、テキストは公共的空間における他者の声として聞き届けられなければならない。テキストは何について、どのような他者の言葉と対話し、どのような応答(意見)を述べているのか。可能であればどのような「世界」をもっているのか。こうしたことを聴き取り、その対話に学習者自身も参入し、テキストが向き合った「何」について自分なりの応答(意見)を述べていくこと。これが古典学習を公共的空間にする際のテキストと学習者との関係である。この関係を構築するためには、各々のテキストが何についての応答(意見)を述べているのか、その最中でどのような他者の言葉(別の他者の意見)と対話しているのかを学習者が分かるようにテキストを差し出されなければならないことなどについて言及した。

第三節ではこれまでのことをもとに第104段の教材化案を提示した。

四、研究の展望

本研究は、古典文学研究と古典教育との架橋を目指して、『宇治拾遺』の教材化を図った。教材化にはテキスト、教育内容、学習者が関係するが、前者二つをもとに構想したものである。テキストとしては対話を拓くテキストを用い、教育内容としては公共性にたつことのできる主体

の育成をねらった。

今後は、こうした試みを中等教育現場で実践し、本研究の修正を図りながら、中等教育現場の国語科教員のヒントになる提案をしていく必要がある。その際、教育方法論や評価論の成果を踏まえながら、提案をしていくことが必要であろう。加えて、益田が言及しているテキストの差し出し方についても、有効か否かを検討していく必要がある。

また、本研究は現代の古典学習が直面している「古典嫌い」の問題や、言語的な障害の克服などについては言及できていない。これらについても国語学や心理学の知見などを取り入れながら実践を繰り返すことで、提案をしていく必要がある。

最後に、『宇治拾遺』の表現性分析に関しては、近年の説話研究を十分に生かせていない。第一部でも述べたように、説話集テキストを対象とし、言語場から表現性を捉え直すことは今なお有効である。近年の説話研究が明らかにしてきた、また他のジャンルの研究が明らかにしてきた成果を生かすことで、中世言語場に迫り、『宇治拾遺』の表現性を捉え直すことで、新たな『宇治拾遺』像を示すことができると思われる。

こうした点で、本研究は古典文学研究と古典教育との架橋の途上にある。実践、提案を繰り返すことで、本研究を補完していく必要がある。これを今後の課題としたい。

五、主要参考文献

■単行本

- ・荒木浩『説話集の構想と意匠―今昔物語集の成立と前後―』（勉誠出版、二〇二二年）
- ・石原千秋他編『読むための理論―文学・思想・批評』（世織書房、一九九一年）
- ・伊東玉美『宇治拾遺物語のたのしみ方』（新典社、二〇一〇年）
- ・伊東玉美『ビギナーズ・クラシックス 日本の古典 宇治拾遺物語』（KADOKAWA、二〇一七年）
- ・大津透『日本の歴史06 道長と宮廷社会』（講談社、二〇〇九年）
- ・小熊英二『民主』と『愛国』―戦後日本のナショナルリズムと公共性―（新曜社、二〇〇二年）
- ・梶川信行編『おかしいぞ！ 国語教科書―古すぎる万葉集の読み方』（笠間書院、二〇一六年）
- ・河添房江編『アクティブ・ラーニング時代の古典教育―小・中・高・大の授業づくり―』（東京学芸大学出版会、二〇一八年）
- ・倉本一宏『藤原道長の日常生活』（講談社、二〇一三年）
- ・倉本一宏『藤原道長の権力と欲望―『御堂関白記』を読む』（文藝春秋、二〇一三年）
- ・小峯和明『宇治拾遺物語の表現時空』（若草書房、一九九九年）
- ・権安理『公共的なるもの―アーレントと戦後日本』（作品社、二〇一八年）
- ・齋藤純一『思考のフロンティア 公共性』（岩波書店、二〇〇〇年）
- ・齋藤純一『思考のフロンティア 自由』（岩波書店、二〇〇五年）
- ・齋藤純一『政治と複数性―民主的な公共性にむけて―』（岩波書店、二〇〇八年）
- ・坂本賞三『藤原頼通の時代―摂関政治から院政へ―』（平凡社、一九九一年）
- ・佐藤泉『戦後批評のメタヒストリー―近代を記憶する場』（岩波書店、二〇〇五年）
- ・下向井龍彦『日本の歴史07 武士の成長と院政』（講談社、二〇〇九年）

- ・関口敏美『柳田國男の教育構想―国語教育・社会科教育への情熱』（塙書房、二〇一二年）
- ・説話文学会編『説話から世界をどう解き明かすのか―説話文学会設立50周年記念シンポジウム「日本・韓国」の記録―』（笠間書院、二〇一三年）
- ・平雅行『日本中世の社会と仏教』（塙書房、一九九二年）
- ・平雅行『鎌倉仏教と専修念仏』（法蔵館、二〇一七年）
- ・平雅行『日本史ブックレット人028 法然―貧しく劣った人びとと共に生きた僧―』（山川出版社、二〇一八年）
- ・竹村信治『言述論―説話集論』（笠間書院、二〇〇三年）
- ・田近洵一『現代国語教育史研究』（富山房インターナショナル、二〇一三年）
- ・鶴見俊輔著、松田哲夫編『鶴見俊輔全漫画論1 漫画の読者として』（筑摩書房、二〇一八年）
- ・テッサ・モーリス・スズキ著、伊藤茂訳『愛国心を考える』（岩波書店、二〇〇七年）
- ・鳥羽耕治『1950年代―「記録」の時代』（河出書房新社、二〇一〇年）
- ・難波博孝『母語教育という思想―国語科解体／再構築に向けて―』（世界思想社、二〇〇八年）
- ・西尾光一『中世説話文学論』（塙書房、一九六三年）
- ・ハルオ・シラネ他編『創造された古典―カノン形成・国民国家・日本文学』（新曜社、一九九九年）
- ・土方洋一編『古典を勉強する意味ってあるんですか？ことばと向き合う子どもたち』（青簡舎、二〇一二年）
- ・平岡聡『浄土思想入門―古代インドから現代日本まで』（KADOKAWA、二〇一八年）
- ・廣田収『宇治拾遺物語』の中の昔話』（新典社、二〇〇九年）
- ・本田義憲他編『説話の講座 第一巻 説話とは何か』（勉誠社、一九九一年）
- ・本田義憲他編『説話の講座 第二巻 説話の言説―口承・書承・媒体―』（勉誠社、一九九一年）
- ・本田義憲他編『説話の講座 第三巻 説話の場―唱導・注釈―』（勉誠社、一九九三年）
- ・本田義憲他編『説話の講座 第四巻 説話集の世界Ⅰ―古代―』（勉誠社、一九九二年）
- ・本田義憲他編『説話の講座 第五巻 説話集の世界Ⅱ―中世―』（勉誠社、一九九三年）
- ・本田義憲他編『説話の講座 第六巻 説話とその周縁』（勉誠社、一九九三年）
- ・前田雅之『古典的思考』（笠間書院、二〇一一年）
- ・前田雅之『古典論考―日本という視座』（新典社、二〇一四年）
- ・前田雅之『なぜ古典を勉強するのか―近代を古典で読み解くために―』（文学通信、二〇一八年）
- ・前田雅之他編『新しい作品論』へ、〈新しい教材論〉へ 古典編―文学研究と国語教育研究の交差―1』（右文書院、二〇〇三年）
- ・前田雅之他編『新しい作品論』へ、〈新しい教材論〉へ 古典編―文学研究と国語教育研究の交差―2』（右文書院、二〇〇三年）
- ・前田雅之他編『新しい作品論』へ、〈新しい教材論〉へ 古典編―文学研究と国語教育研究の交差―3』（右文書院、二〇〇三年）
- ・前田雅之他編『新しい作品論』へ、〈新しい教材論〉へ 古典編―文学研究と国語教育研究の交差―4』（右文書院、二〇〇三年）
- ・榎井英人『国語力』観の変遷―戦後教育を通して―』（溪水社、二〇〇六年）
- ・益田勝実著、鈴木日出男他編『益田勝実の仕事1 説話文学と絵巻』（筑摩書房、二〇〇六年）
- ・益田勝実著、鈴木日出男他編『益田勝実の仕事2 火山列島の思想』（筑摩書房、二〇〇六年）
- ・益田勝実著、幸田国広編『益田勝実の仕事5 国語教育論集成』（筑摩書房、二〇〇六年）
- ・松尾葦江編『ともに読む古典―中世文学編―』（笠間書院、二〇一七年）

- ・美川圭『院政—もうひとつの天皇制』（中央公論新社、二〇〇六年）
- ・美川圭『日本史リブレット人 021 後三条天皇—中世の基礎を築いた君主—』（山川出版社、二〇一六年）
- ・三木紀人編『今昔物語集・宇治拾遺物語必携』（學燈社、一九八八年）
- ・明治書院編、全国高等学校国語教育研究連合会協力『高等学校国語科授業実践報告集 古典編1』（明治書院、二〇一四年）
- ・明治書院編、全国高等学校国語教育研究連合会協力『高等学校国語科授業実践報告集 古典編2』（明治書院、二〇一四年）
- ・明治書院編、全国高等学校国語教育研究連合会協力『高等学校国語科授業実践報告集 古典編3』（明治書院、二〇一四年）
- ・森正人『今昔物語集の生成』（和泉書院、一九八六年）
- ・森正人『場の物語論』（若草書房、二〇一二年）
- ・渡辺春美『戦後古典教育論の研究—時枝誠記・荒木繁・益田勝美三氏を中心に—』（溪水社、二〇〇四年）
- ・渡辺春美『関係概念—に基づく古典教育の研究—古典教育活性化のための基礎論として—』（溪水社、二〇一八年）
- ・G・ジュネット著、花輪光他訳『物語のディスクール—方法論の試み』（書肆風の薔薇、一九八五年）
- ・G・プリンス著、進藤健一訳『改訂 物語論事典』（松柏社、二〇一五年）
- ・H・アレント著、志水速雄訳『人間の条件』（筑摩書房、一九九四年）
- ・J・ハーバーマス著、細谷貞雄他訳『公共性の構造転換—市民社会の一カテゴリーについての探究—第2版』（未來社、一九九四年）
- ・M・バフチン著、新谷敬三郎他訳『ミハイル・バフチン著作集⑧ ことば 対話 テキスト』（新時代社、一九八八年）
- ・M・フーコー著、慎改康之訳『知の考古学』（河出書房新社、二〇一二年）
- ・M・フーコー著、慎改康之訳『言説の領界』（河出書房新社、二〇一四年）

■論文、授業実践報告、授業提案など

- ・阿部泰郎「1200年前後—後白河院—後鳥羽院の時代」（『国文学』第四五卷第七号、二〇〇〇年六月）
- ・荒木浩「異国へ渡る人びと—宇治拾遺物語論序説—」（『国語国文』第五五卷第一号、一九八六年一月）
- ・荒木浩「宇治拾遺物語の時間」（『中世文学』第三三号、一九八八年六月）
- ・荒木浩「宇治大納言物語」享受史上の分岐—顕昭所引の佚文をめぐって—」（『説林』第三六号、一九八八年二月）
- ・荒木浩「へ次第不同」の物語—宇治拾遺物語の世界—」（『説話と説話文学の会編』『説話論集第一集 説話文学の方法』所収、清文堂、一九九一年五月）
- ・荒木浩「ひらかれるへとき」の物語—『宇治拾遺物語』の中へ—」（『国文学』第四〇巻第一二号、一九九五年一〇月）
- ・荒木浩「説話文学と説話の時代」（久保田淳他編『岩波講座日本文学史第五卷 一三・一四世紀の文学』所収、一九九五年二月）
- ・荒木浩「書評 小峯和明著『宇治拾遺物語の表現時空』」（『立教大学日本文学』第八六号、二〇〇一年七月）
- ・荒木浩「書評 竹村信治著『言述論—言説集論—』」（『説話文学研究』第四〇号、二〇〇五年七月）
- ・荒木浩「宇治拾遺物語」再読とその方法—「デジタル社会の中の説話文学研究」—」（『説話文学研究』第四三号、二〇〇八年七月）
- ・池上洵「『宇治拾遺物語』序—もとどりをゆひわけて—考—」（『日本文学』第四三三巻第一〇号、一九九四年一〇月）
- ・市毛勝雄「文法抜き音読指導を」（『教育科学国語教育』第六九六号、二〇〇八年八月）
- ・稲垣泰一「『宇治拾遺物語』の表現」（『説話』第八号、一九八八年六月）
- ・井上宗雄「真観をめぐって—鎌倉期歌壇の一側面—」（『和歌文学研究』第四号、一九五七年八月）
- ・今井明「後嵯峨院歌壇成立の一側面」（『鹿兒島短期大学研究紀要』第四五号、一九九〇年三月）

- ・今井明「続後撰和歌集に見る「新古今時代」——その撰歌と歌壇像——」(『香椎湯』第四六号、二〇〇〇年二月)
- ・今井明「勅撰和歌集と天皇正統観——続後撰和歌集の場合——」(『文芸と思想』第六九号、二〇〇五年二月)
- ・岩崎淳「学習指導要領の改訂と古典指導の方向」(『月刊国語教育』第二八卷第四号、二〇〇八年六月)
- ・岩崎淳「古典は人生を豊かにする——なぜ古典を学ぶのか——」(『教育科学国語教育』第七三三三号、二〇一一年二月)
- ・岩津資雄「藤原為家の歌論」(『国文学』第三卷七号、一九五八年六月)
- ・有働玲子「古典の音読・朗読指導——声を聞き合う学習を作る——」(『月刊国語教育研究』第四八八号、二〇一二年二月)
- ・大熊徹「楽しく繰り返し返す音読から暗唱へ」(『教育科学国語教育』第七三三三号、二〇一一年二月)
- ・大槻和夫「新学習指導要領はどのような国語科教育実践を求めているのか——中学校の場合——」(『教育科学国語教育』第六九四号、二〇〇八年六月)
- ・小川剛生「宗尊親王和歌の一特質——「六帖題和歌」の漢詩文撰取をめぐって——」(『和歌文学研究』第六八号、一九九四年五月)
- ・小川豊生「捏造される「始まり」——院政期の文化戦略——」(河添房江他編『叢書想像する平安文学』「平安文学」というイデオロギー」所収、勉誠出版、一九九九年五月)
- ・小田迪夫「伝統的な言語文化の学習を深める旧教材をふりかえる」(『月刊国語教育研究』第四五七号、二〇一〇年五月)
- ・小野牧夫「古典の教育——徒然草をめぐって——」(『日本文学』第三卷第一二号、一九五四年一月)
- ・蔭山江梨子「中学・高校における古典指導の開発」(『教育科学国語教育』第七〇八号、二〇〇九年五月)
- ・金子直樹「古典との出会い(2)——中学1年「宇治拾遺物語」の授業から——」(『中等教育研究紀要(広島大学附属福山中・高等学校)』第五六卷、二〇一六年三月)
- ・鎌田政司「古典B」における古文指導の工夫——「学習の手引」の活用を通して——」(『月刊国語教育研究』第四八八号、二〇一二年二月)
- ・木村紀子「宇治大納言物語の語りと精神」(『奈良大学紀要』第一二二号、一九八三年二月)
- ・木村紀子「二かたり」および物語集の生成——宇治大納言物語から宇治拾遺物語へ——」(『国語国文』第五三三卷第六号、一九八四年六月)
- ・久保田淳「為家と光俊」(『国語と国文学』第三五卷第五号、一九五八年五月)
- ・久保田淳「宇治拾遺物語」の「都」(『説話文学研究』第一二二号、一九七七年六月)
- ・黒岩淳「俳諧連歌を理解させる「奥の細道」——芭蕉の発句をもとに「表八句」創作——」(『月刊国語教育』第二九卷第一号、二〇〇九年四月)
- ・小出素子「宇治拾遺物語」の説話配列について——全巻にわたる連関表示の試み——」(『平安文学研究』第六七輯、一九八二年六月)
- ・小内一明「宇治大納言物語」をめぐって——室町期の記録を中心に——」(小峯和明編『日本文学研究資料新集 今昔物語集と宇治拾遺物語——説話と文体』所収、有精堂、一九八六年七月)
- ・小林一彦「為家・為氏・為世——新古今の亡霊と定家の遺志——」(『国文学』第四二卷第一三三号、一九九七年一月)
- ・小林強「後嵯峨院の詠作活動に関する基礎的考察」(『中世文芸論稿』第一六号、一九九三年三月)
- ・小林保治他「座談会 今昔・宇治拾遺——教材としての可能性」(『月刊国語教育』第七卷第二号、一九八七年二月)
- ・小峯和明「宇治拾遺物語」(『解釈と鑑賞』第四六卷八号、一九八一年八月)
- ・小峯和明「今昔・宇治成立論の現在——宇治大納言物語の幻影など——」(『国文学』第二九卷第九号、一九八四年七月)
- ・小峯和明「宇治拾遺物語の成立と宇治大納言物語」(小峯和明編『日本文学研究資料新集 6 今昔物語集と宇治拾遺物語 説話と文体』所収、有精堂、一九八六年七月)
- ・小峯和明「世俗説話集の語り——『宇治拾遺物語』を中心に——」(日本文学協会編『日本文学講座三 神話・説話』所収、大修館書店、一九八七年七月)

- ・小峯和明「宇治拾遺物語の表現時空―ひしめくもの―」(『国文学研究資料館紀要』第一五号、一九八九年三月)
- ・小峯和明「宇治拾遺物語論―(もどき)の文芸―」(『国文学研究資料館紀要』第一六号、一九九〇年三月)
- ・小峯和明「宇治拾遺物語と(猿楽)」(水原一編『伝承の古層―歴史・軍記・神話―』所収、桜楓社、一九九一年五月)
- ・小峯和明「説話研究の現在」(『説話文学研究』第二十九号、一九九四年六月)
- ・サークル・いしげえ「書評 農文協の『洪水』と『風に立つ人』」(『日本文学』第三卷第七号、一九五四年七月)
- ・サークル・いしげえ「生きる」をめぐって」(『日本文学』第三卷第一〇号、一九五四年一〇月)
- ・サークル・いしげえ「北多摩につたわる写し絵」(『日本文学』第四卷第二号、一九五五年二月)
- ・坂口智子「古典の世界を楽しもう―『徒然草』の実践を通して―」(『月刊国語教育研究』第四六〇号、二〇一〇年八月)
- ・斎藤歩「理想としての『後嵯峨院時代』」(『日本文学』第五一卷第二号、二〇〇二年一月)
- ・佐藤晃「『宇治拾遺物語』の和歌説話―主題の相互関連性の視点から―」(『日本文芸論叢』第二号、一九八三年三月)
- ・佐藤晃「『宇治拾遺物語』の説話配列における表現方法」(『日本文芸論叢』第三号、一九八四年三月)
- ・佐藤晃「『宇治拾遺物語』における言語遊戯と表現」(『日本文芸論叢』第四号、一九八五年三月)
- ・佐藤晃「『宇治拾遺物語』の表現機構」(『中世文学』第三二号、一九八七年五月)
- ・佐藤晃「演ずる主体―『宇治拾遺物語』の表現機構―」(『文芸研究』第一一九号、一九八八年九月)
- ・佐藤晃「読みを示唆するもの―『宇治拾遺物語』の序文・冒頭話、および目録―」(『弘前大学国語国文学』第一二二号、一九九〇年三月)
- ・佐藤晃「書評 小峯和明著『宇治拾遺物語の表現時空』」(『国文学研究』第一三二号、二〇〇〇年一〇月)
- ・佐藤恒雄「統後撰集の当代的性格」(『国語国文』第三七卷第三号、一九六八年三月)
- ・佐藤恒雄「統後撰和歌集の撰集意識―集名の考察から―」(『言語と文芸』第五七号、一九六八年三月)
- ・佐藤恒雄「後嵯峨院の時代とその歌壇」(『国語と国文学』第五四卷第五号、一九七七年五月)
- ・佐藤恒雄「藤原光俊伝考―出家まで―(上)―」(『中世文学研究』第八号、一九八二年八月)
- ・佐藤恒雄「藤原光俊伝考―出家まで―(下)―」(『中世文学研究』第九号、一九八三年八月)
- ・佐藤恒雄「後鳥羽院―文学・政治・出家―」(『解釈と鑑賞』第六四卷第五号、一九九九年五月)
- ・佐藤恒雄「統古今和歌集の撰集について(再考)―」(『香川大学教育学部研究報告(第一部)』第一二二二号、二〇〇四年九月)
- ・佐藤恒雄「統古今和歌集の御前評定」(『国語と国文学』第八二卷第四号、二〇〇五年四月)
- ・佐野比呂己「古典教育の意義―古文を中心として―」(『解釈』第五四卷第五・六号、二〇〇八年五月)
- ・澤田浩文「古典世界との共通点を探る―自作歌物語と『伊勢物語』の比較を通して―」(『月刊国語教育研究』第四六六号、二〇一一年二月)
- ・塩苅有紀「『日本神話かるた』と『読み聞かせ』で日本神話を語り継ぐ―小学校二年 日本神話「くにうみ」―」(『教育科学国語教育』第七二三号、二〇一〇年六月)
- ・柴佳世乃「能読の道命阿闍梨―『宇治拾遺物語』第一話への一視角―」(『説話文学研究』第三三三号、一九九八年)
- ・島津忠夫「宇治拾遺物語の序文」(『中世文学』第二八号、一九八三年一〇月)
- ・須貝千里「一寸待って」と呼びかけて……―益田勝実の仕事―」(『日本文学』第五六卷第一号、二〇〇七年一月)
- ・須田実「言語文化に親しむ古典の授業改善―古典を通して日本人の「心の原点」や「言語の特質」を学び合う―」(『教育科学国語教育』第六九六号、二〇〇八年八月)
- ・世羅博昭「古典領域における実践研究の成果と展望」(『全国大学国語教育学会編『国語科教育学研究の成果と展望』』所収、明治図書、二〇〇二年六月)

- ・平雅行「鎌倉仏教論」(朝尾直弘他編『岩波講座 日本通史8 中世2』所収、岩波書店、一九九四年三月)
- ・平雅行「黒田俊雄氏と顕密体制論」(『歴史科学』第一三八号、一九九四年一月)
- ・平雅行「殺生禁断の歴史の展開」(大山喬平教授退官記念会編『日本社会の史的構造 古代・中世』所収、思文閣出版、一九九七年五月)
- ・平雅行「仏教思想史研究と顕密体制論」末木文美士氏の批判に応える(『日本史研究』第四二二号、一九九七年一〇月)
- ・平雅行「日本の肉食慣行と肉食禁忌」(脇田晴子・アンヌ・ブツシイ編『アイデンティティ・周縁・媒介』所収、吉川弘文館、二〇〇〇年八月)
- ・平雅行「神仏と中世文化」(歴史学研究会・日本史研究会編『日本史講座4 中世社会の構造』所収、東京大学出版会、二〇〇四年九月)
- ・平雅行「中世寺院の暴力とその正当化」(『九州史学』第一四〇号、二〇〇五年二月)
- ・平雅行「殺生禁断と殺生罪業観」(脇田晴子・マーティン・コルカット・平雅行編『周縁文化と身分制』所収、思文閣出版、二〇〇五年三月)
- ・平雅行「中世仏教における呪術性と合理性」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第一五七集、二〇一〇年三月)
- ・高橋史樹「学習者の「もの」の見方・感じ方・考え方」を再構築するための古典の授業―『伊勢物語』第六段「芥川」を学習材として―(『月刊国語教育研究』第四七一号、二〇一一年七月)
- ・竹村信治「演習ノート 宇治拾遺物語 封じられた龍―二一(静観) 僧正、大嶽ノ岩祈失事―」(『香推瀉』第三六号、一九九〇年一〇月)
- ・竹村信治「宇治拾遺物語論―表現性とその位相―」(『文芸と思想』第五五号、一九九一年二月)
- ・竹村信治「説話研究の現在」(『国文学』第四〇巻第一二号、一九九五年一〇月)
- ・竹村信治「はなのはなし―説話と表現(1)―」(『国語教育研究』第三九号、一九九六年三月)
- ・竹村信治「説話と言表―説話と表現(2)―」(『論叢国語教育学』第四号、一九九六年三月)
- ・竹村信治「説話の言述―『宇治拾遺物語』から―」(『説話と説話文学の会編』『説話論集第七集 中世説話文学の世界』所収、清文堂、一九九七年一〇月)
- ・竹村信治「主体へわたし」考―説話と表現(4)―」(『国語教育研究』第四一号、一九九八年三月)
- ・竹村信治「主体へわたし」続考―説話と表現(5)―」(『国語教育研究』第四二号、一九九九年六月)
- ・竹村信治「主体へわたし」三考―説話と表現(6)―」(『論叢国語教育学』第五号、一九九九年三月)
- ・竹村信治「今昔物語集」の言述―世俗部(巻二六―三二)の位相―」(『説話と説話文学の会編』『説話論集第一二集 今昔物語集』所収、清文堂、二〇〇三年六月)
- ・竹村信治「パロディと中世―“不成立”問題にむけて―」(『中世文学』第五三号、二〇〇八年六月)
- ・竹村信治「伝統的な言語文化」の掴み直し(上)―『伊勢物語』初段、「馬盗人」などを例に―」(『国語教育研究』第五三号、二〇一二年三月)
- ・竹村信治「伝統的な言語文化」の掴み直し(下)―『伊勢物語』初段、「今昔物語集」「馬盗人」などを例に―」(『論叢国語教育学』第八号、二〇一二年七月)
- ・竹村信治「古文学習の課題―学力評価問題パイロット調査から―(上)」(『論叢国語教育学』第九号、二〇一三年七月)
- ・竹村信治「古文学習の課題―学力評価問題パイロット調査から―(中)」(『国語教育研究』第五五号、二〇一四年三月)
- ・竹村信治「古文学習の課題―学力評価問題パイロット調査から―(下)」(『論叢国語教育学』第一〇号、二〇一四年七月)
- ・竹村信治「何を読むのか―教科書の中の古典「文学」―」(『日本文学』第六三巻第一号、二〇一四年一月)
- ・竹村信治「文学という経験―教室で―」(『文学』第一五巻第五号、二〇一四年九月)
- ・竹村信治「研究者が国語教育を考えるということ―「言説の資源」をめぐる」(『レポート笠間』第五七号、二〇一四年一月)
- ・竹村信治「教材発掘 No.9 宇治拾遺物語―序文を読む―」(『国語教育研究』第五七号、二〇一六年三月)

- ・竹村信治「読みのヴァージョン―パフォーマンス評価の観点―」(『中等教育研究紀要』第六二号、二〇一六年三月)
- ・竹村信治「遭遇と対話―境界で／境界から―」(『アジア遊学』第一九七号、二〇一六年六月)
- ・竹村信治「読みのヴァージョンⅡ―語りのダイナミズムへ―」(『中等教育研究紀要』第六三号、二〇一七年三月)
- ・竹村信治「読みのヴァージョン(3)―作者・critainへの接近―」(『中等教育研究紀要』第六四号、二〇一八年三月)
- ・谷口耕一「宇治拾遺物語における仲胤僧都の位置」(『中世文学』第一九号、一九七四年八月)
- ・田山淳子「徒然草」の序段を学習課題にする」(『月刊国語教育研究』第四四〇号、二〇〇八年二月)
- ・鶴田清司「外的要因としての法改正と内的要因としての学力調査」(『教育科学国語教育』第七〇一号、二〇〇八年二月)
- ・鶴田清司「古典学習における暗記・音読・暗唱を超えて」(『教育科学国語教育』第七〇六号、二〇〇九年五月)
- ・富家淳夫「古典(韻文・漢詩)の優れた表現やリズムを読み味わう国語学習―文字カードや枝カードを用いた音読や暗唱を通して―」(『月刊国語教育研究』第四六二号、二〇一〇年一月)
- ・富山哲也「古典に一層親しませるために」(『日本語学』第三七七号、二〇一一年四月)
- ・内藤一志「益田勝実の古典教育論についての検討」(『語学文学』第三一〇号、一九九三年三月)
- ・内藤一志「読む 益田勝実氏の古典教育論再読」(『日本文学』第四五卷第九号、一九九六年九月)
- ・内藤一志「古典領域における実践研究」(『全国大学国語教育学会編『国語科教育学研究の成果と展望Ⅱ』所収、学芸図書、二〇一三年三月)
- ・内藤一志「古典」(高木まさき他編『国語科重要用語事典』所収、明治図書、二〇一五年八月)
- ・中川博夫「校本『簸河上』」(『国文学研究資料館紀要』第二二二号、一九九六年三月)
- ・中川博夫「『簸河上』を読む」(『国語と国文学』第七四卷第一号、一九九七年一月)
- ・長崎和彦「女房たちのうわさ話―源氏物語「光源氏の誕生」―」(『月刊国語教育研究』第二九卷第二号、二〇〇九年五月)
- ・中村春作「竹村信治著『言述論―for 説話集論』を「読む」」(『Problematic』第五号、二〇〇四年七月)
- ・中村雅芳「作者の息づかいを実感させる授業」(『日本語学』第三七七号、二〇一一年四月)
- ・鳴島甫「読書へとなぐ伝統的な言語文化の指導」(『月刊国語教育研究』第四三七号、二〇〇八年九月)
- ・難波博孝「伝統は古くないから、こそ」(『教育科学国語教育』第七三三三号、二〇一一年二月)
- ・西岡裕二「徒然草」を使った学習―兼好法師も男だね!―」(『月刊国語教育』第三〇卷第八号、二〇一〇年一月)
- ・野口芳宏「伝統的な言語文化」の指導―その「根本、本質、原点」は―」(『教育科学国語教育』第七〇二二号、二〇〇九年一月)
- ・野本東生「宇治拾遺物語と評語」(『国語と国文学』第八五卷第七号、二〇〇八年七月)
- ・野本東生「宇治拾遺物語第九九話「大膳大夫以長前駆之間事」考―古侍の路頭礼―」(『東京大学 国文学論集』四号、二〇〇九年三月)
- ・長谷川みどり「古典の授業は不易である」(『教育科学国語教育』第七三三三三号、二〇一一年二月)
- ・廣田収「『宇治拾遺物語』の編纂と物語の表現」(『人文学』第一七〇号、二〇〇一年二月)
- ・廣田収「『宇治拾遺物語』の「世俗説話」の研究」(『人文学』一七四号、二〇〇三年一月)
- ・廣田収「『宇治拾遺物語』「小野篁広才事」考」(『同志社国文学』第六二二号、二〇〇五年三月)
- ・深沢徹「散佚「宇治大納言物語」の幻影(上)」(『立教大学日本文学』第四〇号、一九七八年七月)
- ・深沢徹「散佚「宇治大納言物語」の幻影(下)」(『立教大学日本文学』第四一〇号、一九七九年一月)
- ・深谷仁「単元『おくの細道』―芭蕉忍著説を追う―」(『月刊国語教育研究』第四五九号、二〇一〇年七月)
- ・深谷幸恵「読み聞かせと音読を組み合わせる」(『教育科学国語教育』第六九六号、二〇〇八年八月)
- ・福田秀一「鎌倉中期歌壇史における反御子左派の活動と業績(上)」(『国語と国文学』第四一巻第八号、一九六四年八月)

- ・福田秀一「鎌倉中期歌壇史における反御子左派の活動と業績(下)」(『国語と国文学』第四一巻第一一〇号、一九六四年一月)
- ・福田秀一「鎌倉中期反御子左派の古典研究―附、鎌倉中期歌壇史略年表―」(『成城文芸』第三九号、一九六五年五月)
- ・藤平春男「幽玄と有心」(『国文学研究』第四九号、一九七三年二月)
- ・藤平春男「日本の美論―中世歌論の追究したもの―(相良亨他編『講座日本思想5 美』所収、東京大学出版会、一九八四年)
- ・藤本宗利「古典教材としての唱歌―歌詞の中の「伝統的な言語文化」(『月刊国語教育』第三〇巻第二号、二〇一〇年五月)
- ・藤原かおり「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の指導―音読で伝統的な言語文化の特性を体験する授業を―(『教育科学国語教育』第七二九号、二〇一〇年一〇月)
- ・藤原正義「古典教育―徒然草を中心として―」(『日本文学』第四巻第二号、一九五五年二月)
- ・堀田悟史「高等学校における「伝統的な言語文化」の教材開発」について―「古文の理解」から「古文との対話」へ導く教材開発の観点―(『月刊国語教育研究』第四五九号、二〇一二年五月)
- ・前田雅之「説話文学の流れ」(『有精堂編集部編『時代別日本文学史辞典・中古編』所収、有精堂、一九九五年一月)
- ・前田雅之「説話研究の現在」(『国文学』第四六巻第一〇号、二〇〇一年八月)
- ・前田雅之「人文学総崩壊の時代と日文協」(『日本文学』第五六巻第四号、二〇〇七年四月)
- ・益田勝実「新しい芸術創造へのねがい―平家物語に関連して―」(『文学』第二一巻第二号、一九五三年二月)
- ・益田勝実「サークルの古代文学研究」(『日本文学』第二巻第二号、一九五三年三月)
- ・益田勝実「源氏物語のいのち」(『日本文学』第二巻第四号、一九五三年六月)
- ・益田勝実「古典教育の反省」(『文学』第二二巻第七号、一九五四年七月)
- ・益田勝実「文学作品にささえられて―わたしたちの仲間づくり―」(『臼井吉見編『現代教養全集14 読書』所収、筑摩書房、一九五九年一月)。初出は大田堯編『農村のサークル活動』(農山漁村文化協会、一九五六年一月)
- ・益田勝実「微牛足あれば―徒然草の一背景―」(『国語と国文学』第三五巻第二号、一九五八年二月)
- ・益田勝実「道徳教育」賛同者である父母との連携について(『日本文学』第七巻第三号、一九五八年三月)
- ・益田勝実「古代説話文学」(岩波書店編『岩波講座 日本文学史1 古代「1」』所収、岩波書店、一九五八年八月)
- ・益田勝実「説話文学の研究テーマ」(『国文学』第三巻第一号、一九五八年一月)
- ・益田勝実「古代説話文学における表現の問題」(『文学』第二六巻第一二号、一九五八年二月)
- ・益田勝実「一つの試み―十年目の報告―」(『日本文学』第一〇巻第七号、一九六一年八月)
- ・益田勝実「祖国愛のふたつのコース」(『教育科学国語教育』第六二号、一九六四年一月)
- ・益田勝実「柳田国男の思想」(後藤総一郎編『柳田国男研究資料集成 第9巻』所収、日本図書センター、一九八六年六月)。初出は『現代日本思想 大系29 柳田国男』(筑摩書房、一九六五年七月)
- ・益田勝実「歴史社会学的研究」(『解釈と鑑賞』第三一巻第一〇号、一九六六年八月)
- ・益田勝実「歴史社会的方法から歴史社会的立場へ」(『日本文学』第一六巻第一〇号、一九六七年一〇月)
- ・益田勝実「神話教育復活をめぐる」(『日本文学』第一七巻第一〇号、一九六八年一〇月)
- ・益田勝実「新しい説話文学の教材」(『国語通信』第一一二号、一九六八年二月)
- ・益田勝実「学校の命運」(『日本文学』第一八巻第一二号、一九六九年二月)
- ・益田勝実「古典文学教育の曲り角で」(『国語通信』第一二七号、一九七〇年六月)
- ・益田勝実「この潮流のなかで」(『日本文学』第二〇巻第一号、一九七一年一月)

- ・益田勝実「煮え湯のこと」(『日本文学』第二〇卷第七号、一九七一年一月)
- ・益田勝実「古典の新しい相貌を」(『国語通信』第一七四号、一九七五年三月)
- ・益田勝実「古典の新しい相貌を(二)」(『国語通信』第一七五号、一九七五年四月)
- ・益田勝実「古典文学教育の場合」(『解釈』第二二卷第五号、一九七六年五月)
- ・益田勝実「古典教育とよばれるもの」(『文学』第四九卷第一〇号、一九八一年一〇月)
- ・益田勝美「芋粥」の位置―『宇治拾遺物語』の作者像―(『日本文学誌要』第二七号、一九八二年二月)
- ・益田勝実他「座談会 文学教育をめぐって―その課題と方法―」(『日本文学』第二卷第七号、一九五三年九月)
- ・益田勝実他「座談会 国文学の世界」(『日本文学』第三卷第三号、一九五四年三月)
- ・益田勝実他「座談会 日本文学研究の歩み」(『文学』第二三卷第三号、一九五五年三月)
- ・益田勝実他「座談会 古典教育について―高等学校学習指導要領改訂草案を中心に―」(『文学』第二八卷第八号、一九六〇年八月)
- ・益田勝実他「座談会 今日における教育の仕事」(『日本文学』第一〇卷第九号、一九六一年一〇月)
- ・益田勝実他「座談会 今日における教育の仕事(2)」(『日本文学』第一〇卷第九号、一九六一年一〇月)
- ・益田勝実他「討論座談会 国語教育における古典と現代」(『言語と文芸』第二六号、一九六三年一月)
- ・益田勝実他「シンポジウム 古典教材は現状でいいか」(『言語と文芸』第四一号、一九六五年七月)
- ・益田勝実他「座談会 古典と現代をどう継ぐか―古典教育の現状と問題点―」(『国語通信』第九九号、一九六七年九月)
- ・益田勝実他「座談会 文学研究への直言」(『日本文学』第一七卷第一号、一九六八年一月)
- ・益田勝実他「座談会 文学研究への直言」(『日本文学』第一七卷第二号、一九六八年二月)
- ・益田勝実他「座談会 事実と虚構―新しい文学教育の可能性」(『国語通信』第一〇六号、一九六八年五月)
- ・益田勝実他「座談会 <文学と言語>の瀬踏み」(『日本文学』第一八卷第四号、一九六九年四月)
- ・益田勝実他「鼎談 古代文学における言語の自立」(『日本文学』第一八卷第五号、一九六九年五月)
- ・益田勝実他「鼎談 古代文学における言語の自立(2)」(『日本文学』第一八卷第六号、一九六九年六月)
- ・益田勝実他「座談会 われわれの学問」(『文学』第三七卷第八号、一九六九年八月)
- ・益田勝実他「座談会 「古典」とはなにか―新版「古典」教科書をめぐって―」(『国語通信』第一四六号、一九七二年五月)
- ・益田勝実他「対談 国文学界の新しい状況と古典教育―「古典」教科書の編集を終わって―」(『国語通信』第一七六号、一九七五年五月)
- ・益田勝実他「座談会 古典研究の姿勢」(『文学』第四六卷第三号、一九七九年三月)
- ・益田勝実他「座談会 文学研究における戦後の出発」(『日本文学』第二七卷第一〇号、一九七九年一〇月)
- ・益田勝実他「座談会 国語教育への提言」(『文学』第四九卷第一〇号、一九八一年一〇月)
- ・益田勝実他「座談会 『文学』の五十年」(『文学』第五一巻第一号、一九八三年一月)
- ・三木紀人「背後の貴種たち―宇治拾遺物語第一〇話とその前後―」(『成蹊国文』第七号、一九七四年二月)
- ・三谷栄一「説話文学の冒頭第一話と農耕儀礼―イザナギ・イザナミのミトノマダグハヒをめぐって―」(『国学院雑誌』第八四卷第五号、一九八三年五月)
- ・松川利広「伝統的な言語文化」の学習指導にグローバルな視点を」(『月刊国語教育研究』第四七四号、二〇一一年一〇月)
- ・松澤直子「古典に親しむ素地」をつくる―国語総合「伊勢物語」における実践―(『月刊国語教育研究』第四四〇号、二〇〇八年一二月)
- ・宮本正義他「関西大会 報告と感想 古典教育―徒然草を中心として―」(『日本文学』第四卷第一号、一九五五年一月)
- ・宮本由里子「古典を楽しむ―テーマで読む二つの古典―」(『月刊国語教育研究』第四五一号、二〇〇九年一月)

- ・森川敦子「意図的、計画的に、昔話や神話の読み聞かせを行う必要性と目的」(『教育学科学国語教育』第七一七号、二〇一〇年一月)
- ・森正人「編纂・説話・表現—今昔物語集の言語行為序説—」(『説話文学研究』第一九号、一九八四年六月)
- ・森正人「場の物語としての宇治拾遺物語」(『日本文学』第三六卷第二号、一九八七年二月)
- ・森正人「宇治拾遺物語の本文と読書行為」(『有精堂編集部編』『日本の文学』第五集)所収、有精堂、一九八九年四月)
- ・森正人「宇治拾遺物語の言語遊戯」(『文学』第五七卷第八号、一九八九年八月)
- ・森正人「宇治拾遺物語縮取翁譚の解釈」(『国語と国文学』第八〇卷第六号、二〇〇三年六月)
- ・安田徳子「反御子左派の撰集と『万葉集』—『万代集』の場合を中心として—」(『国語と国文学』第五五卷第六号、一九七八年六月)
- ・安田徳子「続古今和歌集」賀部の考察—撰集意図との関わりをめぐって—」(『和歌文学研究』第四六号、一九八三年二月)
- ・安田徳子「続古今和歌集の一性格—その政教性をめぐって—」(『名古屋大学国語国文学』第五三三号、一九八三年一月)
- ・安田徳子「建長三年九月十三夜影供歌合について」(『名古屋大学文学部研究論集』第九一号、一九八五年三月)
- ・柳田国男「喜談日録(一)」(伊藤幹治編『柳田国男全集』31 昭和18年、昭和24年)所収、筑摩書房、二〇〇四年)。初出は『展望』創刊号(一九四六年一月)
- ・山岡敬和「宇治拾遺物語成立試論—冒頭語の考察を中心として—」(『國學院雑誌』第八三卷第九号、一九八二年九月)
- ・山岡敬和「宇治拾遺物語増補試論—冒頭語による古事談・十訓抄関係説話の考察—」(『國學院雑誌』第八四卷第一号、一九八三年一月)
- ・山岡敬和「聖と俗への志向—宇治拾遺物語編者の採録意識をめぐって—」(『國學院雑誌』第八五卷第三号、一九八四年三月)
- ・山岡敬和「宇治拾遺物語」序文考—宇治をめぐる夢想—」(『國學院雑誌』第八九卷第一〇号、一九八八年一〇月)
- ・山岡敬和「歩くものの物語—『宇治拾遺物語』を読むこととは—」(『國學院雑誌』第九三卷九号、一九九二年九月)
- ・山岡敬和「境界」としての読書—『宇治拾遺物語』を読むこととは—」(説話と説話文学の会編『説話論集』第七集 中世説話文学の世界』清文堂、一九九七年一〇月)
- ・山口真琴「道真と増命—『宇治拾遺物語』第三二話「柿木に仏現ズル事」私注—」(『Problematic』第六号、二〇〇五年一〇月)
- ・山口真琴「真贋のはざまの「聖」と「獵師」—『宇治拾遺物語』第一〇四話「獵師、仏ヲ射事」考—」(『Problematic』第七号、二〇〇六年一〇月)
- ・山口真琴「へ恥と運をめぐる人々—古事談と宇治拾遺物語の間—」(浅見和彦編『古事談を読み解く』所収、笠間書院、二〇〇八年七月)
- ・山口真琴「説話集に織り込まれたリテラシー—『今昔物語集』『宇治拾遺物語』について—」(『日本文学』第六〇卷第一号、二〇一一年一月)
- ・大和田満里子「徒然草」を四コマ漫画に」(『国語の授業』第二二八号、二〇一〇年六月)
- ・山中恒己「古典教育の再構築に向けて—古典学習の系統化と教材の見直し・精選を—」(『月刊国語教育研究』第四六五号、二〇一一年一月)
- ・山中伸之「実用的な内容の文章を読む」(『教育学科学国語教育』第六九六号、二〇〇八年八月)
- ・渡辺春美「古典学習指導の問題点—学ぶ意味への疑問に答えぬ学習指導—」(『教育学科学国語教育』第六九六号、二〇〇八年八月)
- ・渡辺春美「古典学習材開発・編成の観点—古典学習材の開発・編成個体史を手がかりに—」(『月刊国語教育研究』第四四〇号、二〇〇八年二月)
- ・渡辺真由美「竹取物語」の魅力にせまる」(『月刊国語教育』第三〇卷第八号、二〇一〇年一〇月)
- ・M・フーコー著、根本美作子訳「作者とは何か」(小林康夫他編『フーコー・コレクション』2 文学・侵犯』筑摩書房、二〇〇六年六月)。初出は『フランス哲学協会会報』第六三卷第三号(一九六九年七月)
- ・P・ブルデュー他、石田英敬訳「セミナー—文学場の生成と構造—ピエール・ブルデューを迎えて—」(『文学』第五卷第一号、一九九四年一月)